

---

# 日本ギヤスケル協会

## 第30回 大会

2018年10月6日(土) 13:00 ~ 17:40  
早稲田大学 早稲田キャンパス 9号館 5階 第一会議室  
(東京都新宿区戸塚町一丁目 104 番地)

---

13:00 開会の辞 日本ギヤスケル協会会長 木村 晶子 (早稲田大学教授)

13:05 ~ 14:50 シンポジウム

「比較」で読み解くギヤスケル文学 — 協会創立30周年記念論集を語る

司会・パネリスト: 大野 龍浩 (熊本大学大学院教授)

パネリスト: 江澤 美月 (一橋大学非常勤講師)

パネリスト: 西垣 佐理 (近畿大学准教授)

パネリスト: 木村 正子 (岐阜県立看護大学講師)

パネリスト: 松浦 愛子 (釧路公立大学准教授)

15:05 ~ 15:55 総会

16:10 ~ 17:40 講演 司会: 宇田 和子 (埼玉大学名誉教授)

‘Take no sugar in your tea’: Ethical Economics in Gaskell’s Novels

Dr. Lesa Scholl (Head and CEO of Kathleen Lumley College, University of Adelaide)

17:40 閉会の辞 日本ギヤスケル協会副会長 松岡 光治 (名古屋大学教授)

懇親会: 2018年10月6日(土)

大隈会館1階 楠亭 (大会会場より徒歩5分程度)

参加費: 4,500円

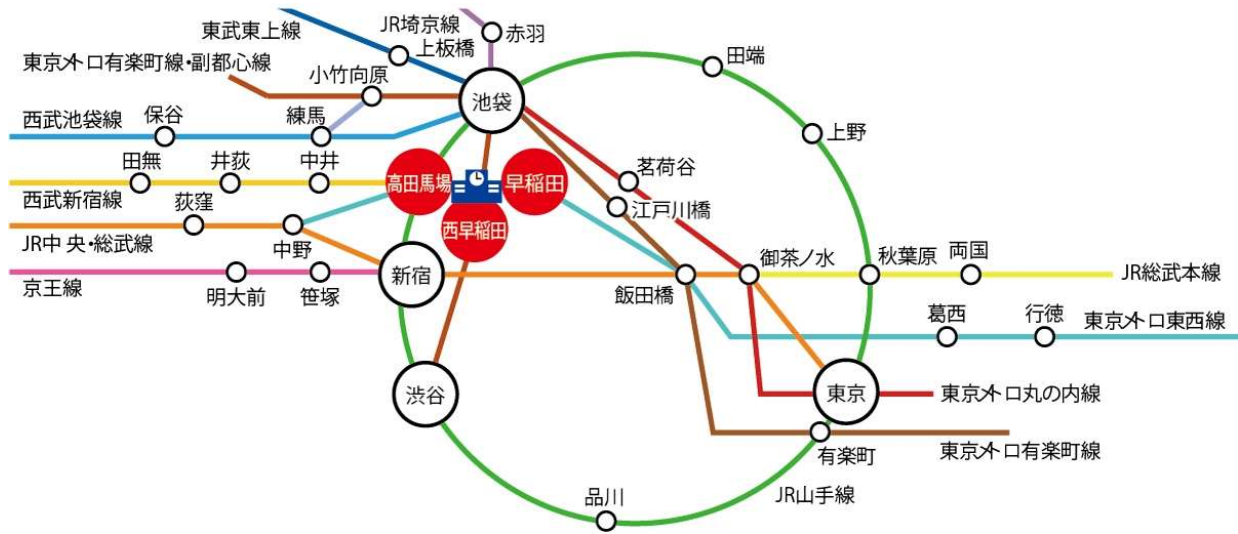
※上記全プログラム、会員外の方の参加も歓迎いたします。

問合先: 〒501-6295 岐阜県羽島市江吉良町 3047-1 岐阜県立看護大学 木村正子研究室

日本ギヤスケル協会事務局: [mkimura@gifu-cn.ac.jp](mailto:mkimura@gifu-cn.ac.jp)

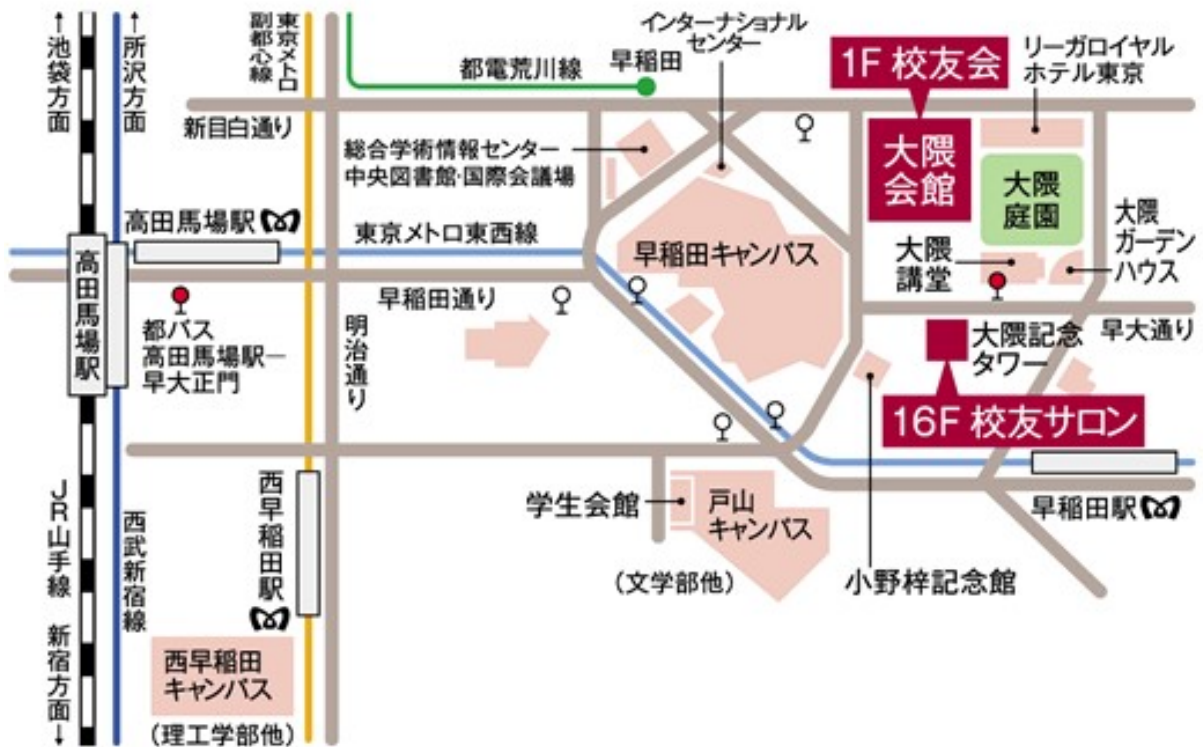
HP: <http://www.gaskell.jp/>

## 会場へのアクセス



### 交通アクセス

- ・ J R 山手線 高田馬場駅から徒歩 20 分
- ・ 西武鉄道 西武新宿線 高田馬場駅から徒歩 20 分
- ・ 東京メトロ 東西線 早稲田駅から徒歩 5 分
- ・ 東京メトロ副都心線 西早稲田駅から徒歩 17 分
- ・ 都バス 学 02 (学バス) 高田馬場駅 - 早大正門下車
- ・ 東京さくらトラム (都電 荒川線) 早稲田駅から徒歩 5 分



大会会場は9号館5階第一会議室です。

南門から入るのが一番近いですが、学バス利用の場合、早大正門下車になります。  
正門から入る場合は、大隈銅像をめざして進み、通り過ぎて、銅像の左方向へ曲がったところの建物になります。

懇親会会場は、正門近くの大隈記念講堂 (21) の入口を右手に見て、直進した突き当りの大隈会館 (20) 1階のレストラン「楠亭」です。



## 発表要旨

### シンポジウム

「比較」で読み解くギaskell文学 ― 協会創立 30 周年記念論集を語る

日本ギaskell協会創立 30 周年を記念して今秋に出版される論文集『比較で照らすギaskell文学』（大阪教育図書）は、3 部構成で 20 章からなる。その魅力の一部を、執筆陣有志 5 名による研究発表により、紹介する。（司会：大野龍浩）

第 1 部「ギaskell世界の真価と発展」より

第 6 章 “Moralization in Elizabeth Gaskell’s Later Fiction”

大野 龍浩

ギaskellの初期作品に見られる教訓主義は、創作技量の円熟とともに後期作品では収まると考えられているが、必ずしもそうとは言えない。キリスト教道徳を吐露する人物は後期作品にも登場するし、それを登場人物の言動に自然に盛り込むことで教訓主義を目立たなくする技法は、初期作品にも顕在している。そもそも、教訓主義か否かの判断は、読み手の主観によるところが大きい。ギaskell文学の真髄は、やはり、作品を信仰告白の手段として用いるところにある。この解釈の妥当性を具体例を引いて考証する。

第 2 部「同時代人と切り結ぶ」より

第 7 章 エリザベス・ギaskellとリー・ハント ― 『メアリ・バートン』批判の背景

江澤 美月

ギaskellが、1848 年に上梓した『メアリ・バートン』は、マンチェスターの貧しい職工の生活を描いたことで、トーリ党支持誌やマンチェスターの織機所有者から批判を受けた。例えば、この小説を強く批判したことで知られる『ブリティッシュ・クォーターリー・レビュー』は、この小説の叙述は一面的であること、特に、この小説に登場する織工の一人、ジョーブ・リーが、経営者が労働者の不幸を助長しているように思えると述べた部分に反発し、階級間の対立を激化させていると批判している。本論考では、ギaskellを評価した同時代人のうち、雑誌『エグザミナー』（1808-21）の編集者であるジャーナリスト、ジェイムズ・ヘンリー・リー・ハント、通称リー・ハント（1784-1859）に注目することで『メアリ・バートン』におけるこの階級間の対立を再考する。

第 10 章 二人のフィリップ ― 『シルヴィアの恋人たち』と『大いなる遺産』にみる男性の夢と挫折

西垣 佐理

『シルヴィアの恋人たち』は、一般に歴史小説だとみなされ、ディケンズの『二都物語』と比較されることが多い。だが、主人公フィリップのシルヴィアに対する恋愛物語として読むな

らば、むしろ『大いなる遺産』の主人公ピップの例と比較したほうが興味深い。二人の男性主人公の恋と挫折の物語における共通点と相違点、そして挫折後の運命の違いを、当時のイギリスで見られた男性性確立に関する問題と絡めて論じてみたい。

## 第12章 Gaskell と Nightingale 姉妹 — それぞれのヒロイズムと *North and South*

木村 正子

Gaskell にとって Nightingale 姉妹との交流は、*North and South* の執筆に大きな影響をもたらした。カリスマ的英雄の Florence と、背後で妹を支える姉 Parthenope。対照的な姉妹のヒロイズムを手かがりとして、Gaskell が *North and South* に描きこんだ英雄像について考察する。

### 第3部 「時空を超えての交流」より

## 第13章 ハビトゥスとテイストの狭間 — 劇作家ディオーン・ブーシコーの『ロング・ストライキ』(1866) のイースト・エンドとウエスト・エンドにおける受容の比較

松浦 愛子

エリザベス・ギヤスケルの社会問題小説『メアリ・バートン』は、英国の労働者階級の状況の正確な記述であると一般に評価されている。しかし、劇作家ディオーン・ブーシコーによる翻案劇 *The Long Strike* の当時の劇評から、労働者のハビトゥスと中産階級のテイストの乖離を指摘し、必ずしもギヤスケルに対する上記の評価は正しくないと指摘した。本発表では、19世紀の民衆政治運動チャーティスト運動と中産階級の「正典的な」社会問題小説の相互交流を示唆する最新の研究も紹介したい。

### 講演

## ‘Take no sugar in your tea’: Ethical Economics in Gaskell’s Novels

Lesa Scholl

Although Gaskell famously claimed to “know nothing of political economy” in her preface to *Mary Barton* (1848), much of her work is concerned with the social impact of economics. In *Cranford* (1851-53), *Ruth* (1853) and *North and South* (1854-55), the central characters are economically vulnerable. The tensions between generosity and inhibiting social agency, self-consciousness and sympathy, manifest in the novels through moments of shared eating: concerns of how much to eat, and what to eat, reveal consciousness of economic precarity. From the “elegant economy” of the inhabitants in *Cranford*, to the restriction imposed on Jemima Bradshaw by her father not to take sugar when visiting the Bensons in *Ruth* because he perceives that they cannot afford it, Gaskell addresses the fraught question of how to respond ethically to economic precarity. Her most optimistic vision, the communal lunch table for the workers at Thornton’s factory in *North and South*, suggests cross-class community engagement as the means to maintain economic and social agency without compromising human feeling.